

無量壽經における法藏説話の般若的理解

上田良準

龍樹が八宗の祖と云はれる如く、般若教學が大乗佛敎の根幹をなすことに異論がないならば、淨土經典もまた、般若思想史の外に位置する筈はない。さうした觀點から、淨土經典を般若の展開の上に理解しようとする試みの、最初の手がかりとして法藏説話を採上げる。「1」法藏比丘の名の教理的解釋の問題は、必ずしも新奇ではなく、如來藏的な理解も行はれてゐる。が、發願↓願成就の楷梯的過程を内容とする説話を理解する上に難點がみられる。いま、智度論(卷一八)に「諸菩薩從初發心求一切種智。於其中間知諸法實相。」是般若波羅蜜。……是般若波羅蜜在佛心中。變名爲一切種智。」と云ひ、菩薩所屬の般若ハラミツと、所屬の一切種智との、本質の同一性と位の相異を大小二つの燈火に譬へ、菩薩の般若ハラミツへ小燈は煩惱・習を盡さないが兎も角も諸法實相を得へ照し、佛の一切種智は煩惱・習を盡して諸法實相を得へ倍復明了ると云つてゐる。その喩に導かれて、一切種智・大燈を世自在王佛(過去五十三佛相承した最後の光)、菩薩所屬の般若ハラミツ・小燈(次第に光を増して遂に大燈と一體になる)を法藏菩薩とみると、法藏説話は所謂ハラミツ道の展開として理解されるやうである。(小稿は主として大品般若發趣品と維摩經佛國品の理解に基く。詳しくは兩

品との比較を掲げるべきであるが、今は無量壽經の文に隨つて概要を記すにとゞめる)。「2」般若發趣品(XX)は十地・初地行の第一項に「深心」を擧げ、「深心とは Sarvajña 心に應ずること、應ずるとは：我作佛すべしと願すること」と説いてゐる。この深心は、維摩經佛國品に擧げる行次第では第4項に當り、1發菩提心(什譯欠)↓2直心↓3發行と次第して意志の高まる相を詮してゐる。その深心を、法藏説話の上に求めるならば、地上發心と云はれる「唯願世尊。我發無上正覺之心。……今我於世速成正覺。拔諸生死勤苦之本之本」に相當するであらうことは、法藏説話を維摩經佛國品の行次第に對照するとき「時有國王……尋發無上正覺意」へ發菩提心——「棄國捐王行作沙門」へ3發行——「我行精進忍終不悔」へ2直心と次第相應して高められたへ4深心であることによつても明かである。而もこの場合、作佛といふ目的から「拔諸生死勤苦之本」を顯はに引出し、利他面を強調する點も注意すべきである。「3」世佛が法藏比丘に「如所修行。莊嚴佛土。汝自當知。」と告げるのは、地上發心で請した「願佛爲我。廣宣經法。」に對する答である。何故に汝自當知であるか。惟ふに大乘の法門・空・真知の境地は戲論寂滅、表現すれば有に墮する——自知不隨他と云ふより他ないからであらう。空をも實體化・偶像化する抜き難い執れを自己のうちに見ればこそ、却つて法藏の「斯義弘深。非我境界。」といふ告白も眞實性をもつ。中論(XXIV)の「若不依俗諦。不得第一義。不得第一義。則不得涅槃。」の含著を彷彿させる世佛と法藏とのこの應答が、上前に「經法」といふ言説を一端拒否した上で、重請に應じて世俗諦の設定へと展開することは、極めて自然な運びである。ここに世俗諦とは、「譬如

大海一人升量經三歷劫數_レ尙可_レ窮_レ底得_レ其妙實、人有_二至心精進求道不_レ止。會當_二剋果_一何願不_レ得。」といふ精進勸勵の喩説である。放逸を所對治とする精進の勸勵が「其高明志願深廣、入深心_レを知らしめした上に説かれてゐることも周到な敘述と云ふべきである。さて世俗諦として精進を説く所以は、行作沙門の法藏比丘に對しては出家道（精進―禪定―智慧）が説かれるからである。智度論（XV）には、福德（在家）・智慧（出家）二道を分ち智慧道として進・定・慧ハラミツを擧げ、「令……不_レ捨精進如是乃能得禪定智慧」「禪定實智慧之根」と言つてゐる。法藏説話も次第の如く、精進ハラミツへ人有_二至心精進求_レ道不_レ止_一、禪定ハラミツへ其心寂靜_一；五劫思惟、般若ハラミツへ攝_二取二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之靈妙_一こし、法藏は「聞_二佛所說淨國嚴土皆悉_レ親見_一」したと述べ、善惡相對の國土も法藏の深められた禪定の無分別智見によつて、相對を絶した嚴淨の一相に觀取される所以を説くものと考へられる。かくて究められた禪定ハラミツの相が「其心寂靜。志無_レ所著。」であり、「五劫思惟」であらう。いま、五劫とか二百一十億といふ數に關しては、象徴的に理解するより他ない。究められた禪定は、ハラミツを表としながら、般若ハラミツと表裏相即する。無量壽經の文面にも、「具足五劫。思惟攝_二取莊嚴佛國清淨之行_一」と、思惟と攝取とが複合形で表はされてゐるのはその故であらうか。〔5〕上前に「攝取」を般若ハラミツに配當したが、そのわけは to embra-

無量壽經における法藏説話の般若的理解（上 田）

ce, to wear を意味する攝取 (pari-grāh) の語義を、多を一に包含する・多の根基を一に究めることと解したからである。従つて般若ハラミツが、五ハラミツを始め無量ハラミツの根基をなし、包むといふ觀點から、般若への通達が「攝取二百一十億諸佛刹土清淨之行」と言はれたものと解せられる。では諸佛刹土とか清淨之行（梵文では *śubhavyūṣāntāra*）は如何なる意味をもつか。國土は所依、能依は衆生であるから、國土清淨と衆生清淨とは離れない。淨土とは衆生の三業の淨化が行ぜられる世界、従つて淨化の行・清淨三業はそのまま淨土の莊嚴と云ふ意味をもつ。いま「攝取」される諸佛刹土とは、施・戒・無數の諸善がハラミツされる個々の行爲の世界であり、逆にハラミツせる諸善の根基を般若ハラミツ一相に究めれば、能「攝取」の一佛國土である。（梵文では一佛國土に攝取 *eke buddhakeṣu pari-grāhya* となつてゐる）。〔6〕般若ハラミツへの楷梯であつた諸善は、般若への通達を轉機として、逆に般若ハラミツから衆生への方便道に轉ずる。佛へ向つた法藏の修行も、衆生の側へ方向を轉換（回向）して四十八願の宣言へと展開する。（中略）、前五ハラミツ等が方便として蘇るならば、そのことは第六般若ハラミツに於て同様でなければならぬ（六度の一支であるから）。法藏の願する土は願文の相からみれば方便の諸善がハラミツした相が述べられてゐるが、一方、その土の衆生であるためには必ずしも諸善ハラミツの楷梯を要しないことになつてゐる（第十八願）。それは第十八願が無明を所對治とする第六般若ハラミツの方便たる使命を荷ふからではないか。因みに抑止・唯除五逆の理解には、大品（卷七〇）に三毒を一端般若の非義となしつゝ三毒の如相には義・非義なしと云ふを採用したい。